全自動尿中有形成分分析装置 UF-5000 における異型細胞測定結果の検討

◎鈴木 郁美[1)]、國井 佳代[1)]、古内 麻理[1)]、國井 徹[1)]、古城 尚子[1)]、狩野 正昭[1)]、鈴木 靖政[1)]
社会福祉法人恩賜財団済生会 山形済生病院[1)]

【はじめに】尿沈渣業務における自動分析装置の実用化と普及が進んでおり、当院においても業務の効率化のため、全自動尿中有形成分分析装置 UF-5000（シスメックス社）が導入された。UF-5000 はフローサイトメトリー法を原理とし、従来機種である UF-1000 よりも測定項目が増え、検体必要量の少量化、体液測定が可能となった。また、新たに研究用項目として異型細胞（Atypical cell、以下 Atyp.C）の測定機能も搭載されている。UF-5000 の測定値に対し、検査システム側が異常と判断したものに関して鏡検法を追加する運用とし、Atyp.C については 0.5/μl 以上を鏡検条件としている。今回、UF-5000 における Atyp.C の測定傾向を把握するため、細胞診結果との比較検討を実施したので報告する。

【方法】UF-5000 を導入した 2019 年 3 月から、尿沈渣と細胞診を同日に実施した 56 件を対象に結果を比較した。UF-5000 にて Atyp.C　0.5/μl 以上を（＋）、0.5/μl 未満を（－）とした。当院の尿細胞診判定は陰性、疑陽性、陽性の３段階分類を採用している。

【結果】UF-5000 にて Atyp.C（＋）と判定されたのは 56 件中 7 件あり、そのうち細胞診判定が疑陽性以上であったのは 3 件、細胞診陰性は 4 件であった。Atyp.C（－）は 49 件あり、そのうち細胞診陰性は 45 件、細胞診疑陽性以上は 4 件であった。完全一致率は 85.7％であった。

【考察】UF-5000 の Atyp.C 偽陰性判定による細胞診結果との不一致例は 4 件であった。UF-5000 の定量感度以下であったため、陰性判定となったと考えられた。細胞診標本の再鏡検にても異型細胞が比較的少数であった。Atyp.C 偽陽性判定による細胞診結果との不一致例は 4 件あり、その理由として深層型の尿路上皮細胞、白血球凝集、細菌塊などを異型細胞として判定している傾向がうかがわれた。

【まとめ】UF-5000 の Atyp.C 検出機能は泌尿器腫瘍診断の一助となり、尿沈渣結果の精度を高め、結果報告の迅速化、効率化に役立つと考えられた。

（連絡先）023-682-1111（内線 2344）